若越郷土研究
39の3

鎌倉期以前の北陸道と水津

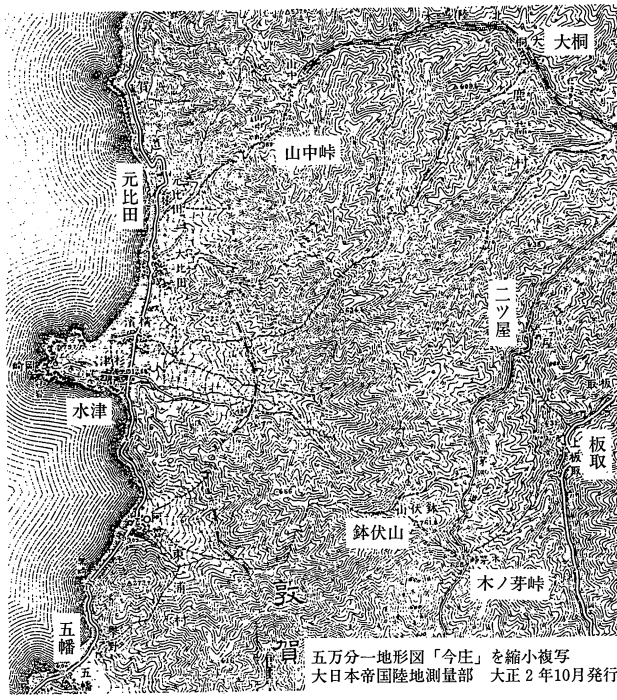
小泉義博

はじめに

かつての北陸道はどのような経路を辿ったのであろうか。筆者はすでに南北朝～戦国期に関して検討を加える機会があり、その結論として、敦賀～府中の経路については、①主要道として、陸路を木ノ芽峠越えで今庄に達し、さらに北上して府中に至る経路、②物資輸送に好都合の経路として（むろん旅行者の利用も多かったが）、敦賀から舟で海路を蕪木（かぶらぎ）浦（南北朝期）、または河野・今泉浦（戦国期）に達し、続いていわゆる西街道を府中まで辿る経路、以上の二経路を確認することができた。[1]

しかるにこの北陸道の経路も、鎌倉期に遡るといささか様相が異なっていたらしい。とくに敦賀湾舟運を利用した場合の上陸地点に著しい相違があり、その結果それに続く陸路部分にも大きな異同が見られた。すなわち、舟から上陸する地点は水津（すいづ）（現在は杉津と書かれるが、ここでは当時の表記「水津」に統一しておく）とする史料がいくつか得られるのである。

そこでこの水津に関する史料をまとめて検



五万分一地形図「今庄」を縮小複写
大日本帝国陸地測量部　大正2年10月発行

討し、鎌倉期およびそれ以前の北陸道の経路について考えてみたいと思う。

一

まず初めに、「藤原隆信朝臣集」の一節を引用しよう。

そのよも明ぬれは、すいつのわたりとて、しほうみのなみもいとけはしけなる、ふねにのりてこき出るもわたりとこそいへと、いとはるかに見わたされたるほと、おそろしくさへおもひつゝけられて、いそにつきてあみひくをみて、

をくあみの　沖をはるかに　めくれとも
都にのみも　ひく心かな[2]

作者藤原隆信は、生没年が康治元年（一一四二）～元久二年（一二〇五）、つまり平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した人物で、肖像画々家の第一人者との名声があり、また藤原定家の異父兄に当たって歌人としても著明である。右の和歌の詞書によると、夜が明けて敦賀津で舟に乗り、「すいつのわたり」に向けて漕ぎ出したのも、ここが渡りだからこそで、恐ろしくさえ思われたが、やがて水津の磯に着いたところ、網を曳く光景が見られたと語られている。渡りの表記が二度も見えていて、水津が敦賀湾舟運の一方の舟着き場であったことが強調されている点に注目しておきたい。

次に『吾妻鏡』の一節を掲げよう。

木曽冠者、為平家追討上洛、廻北陸道。而先陣根井太郎、至越前国水津、与通盛朝臣従軍、已始合戦云々。[3]

右は養和元年（一一八一）に木曽義仲が、平家追討のために北陸廻りで上洛を目指した際の記事であるが、それによると先陣の根井太郎が水津に到達したところ、敵の平通盛軍と遭遇し、早くも合戦に及んだと記されている。この記述から、水津が街道の重要な結節点として認識されており、その争奪が勝敗を分けるものであったことが知られる。

この義仲軍上洛よりもさらに遡った安元三年（一一七七）には、加賀白山神社の神人らが神輿を担ぎ出し、はるばると延暦寺にまで運んで強訴を行ったと『源平盛衰記』に記されるが、その際の経路は次のようであったという。

……神輿を本山延暦寺に振り上げ奉り訴へ申さん……と議定して、各白山権現の御前にして、一味の起請を書き灰に焼きて、神水に浮めてこれを呑む。……安元三年正月晦日辛未の日、吉日なりとて御門出あり。……十一日には須河社、十二日には越前国細呂宜山の麓、福龍寺森の御堂へ入らせ給ふ。……十三日には木田河のはた、十四日には小林の宮、十五日にはかへるの堂、十六日には水津の浦、十七日には敦賀の津、北の端金が崎の観音堂へ入れ奉る。……十（三月）三日に神輿を出し奉って、荒智の中山立越えて、海津の浦に著き給ふ。これより御舟に召して海上に浮びたまへり。[4]

すなわち、加賀須河社（菅生社）～越前細呂宜山麓「福龍寺森御堂」～木田河のはた（いまの足羽川）～「小林の宮」（所在不明）～「かへるの堂」（鹿蒜（かひる）神社）～水津浦～敦賀金が崎の観音堂～荒智中山越え～海津浦、という経路を辿って、神輿が運ばれて行ったというのである。水津浦から敦賀津までの間は、たぶん舟運を利用したものであろう。

そのほか、水津が敦賀湾舟運の上陸地点であったことを示す史料に、次のようなものも

ある。

一、御検注使迎料水津夫伝馬事

合夫十人・伝馬五疋

上郷　夫二人　伝馬二疋口取一人
後山　伝馬一疋口取一人
鏡野地　夫一人
下郷　夫一人　伝馬一疋口取一人
三国湊　夫一人　伝馬一疋在口取
三ケ浦　夫二人
北方　夫二人
阿古江　夫一人

永仁六年八月廿三日(5)

右の史料は、永仁六年（一二九八）八月に作成された注進状で、興福寺から越前河口庄へ下向する検注使を出迎えるための水津夫十人・伝馬五疋の負担配分を記したもので、坪江上郷からは水津夫二人・伝馬二疋（口取一人を付ける）、後山からは伝馬一疋（口取一人）などと割り当てられているのである。冒頭に見える「御検注使迎料水津夫伝馬事」との表記から考えれば、「水津夫」という熟語が成立していたと言えそうである。無論これは水津まで出迎えのために派遣される人夫の意味で、検注使が敦賀から舟に乗って水津に着くことなっていたために、河口・坪江庄からわざわざ夫・伝馬を派遣してここに出迎え、その荷物などを運んだのである。つまりこの史料からは、鎌倉期の敦賀湾舟運が、敦賀～水津の間に運行されていたことが確認できるのである。ただし、本来はこのように夫・伝馬の準備が義務付けられていたが、右の史料では「迎料」と記されているから、場合によっては水津で現地の人夫・伝馬を雇用し、河口・坪江庄に到着後にその費用をどこが負担するかの配分を記したものと考えるべきものかも知れない。

最後に、『万葉集』にまで遡って考えてみると、次の和歌が注目される。

角鹿津乗船時、笠朝臣金村作歌一首并短歌…（長歌略す）…

越の海の　手結が浦を　旅にして　見れば
ともしみ　大和思ひつ(6)

右の作者笠金村は、角鹿津（敦賀津）で舟に乗って海上を北に向かい、途中に手結が浦（田結浦）の集落を眺めているのである。到着地点は記されていないが、水津であった可能性は高いであろう。この歌によって、奈良期でも敦賀以北に向かう旅行者は敦賀湾舟運を利用し、その上陸地点は水津であったと推測されるのである。

二

舟運の上陸地点が水津であった理由は、敦賀湾の波浪と砂浜海岸の発達状況に関わっている。すなわち敦賀半島が横たわる影響で、湾内では水津付近まで比較的に波浪が低いのである。しかし水津から北では外海となって波浪が高くなる。また砂浜海岸の形成もこの水津付近までのことで、ここより北では砂浜はほとんど見られない。その理由は、水津以北の海岸が断層によって形成されているために、沿岸流による土砂堆積がそもそも不可能な地形だからである。さらに、地形図で見ると分かるように、水津の西には小さい岬「岡崎」があり、これによって水津には外海の波浪がほとんど押し寄せることなく、舟運の上陸地点としては実に好都合なのである。

このように好条件の水津であったが、しかし南北朝期になるとここはほとんど利用されなくなり、舟は専ら蕪木浦へ向かうようにな

る。[7]その原因が何かはまだ未詳であるが、敢えて想像を述べておくならば、こうした変動の前提としてまず、蕪木浦から府中に向かいわゆる西街道の整備が実施されていなければならない。つまり鎌倉末期ころに、西街道の拡幅や削平の工事、あるいは蕪木浦の津としての整備・充実（砂浜がほとんどないので上陸設備が必要となる）の工事が実施され、また物資輸送の手段たる馬・牛などの配備も行われたのではないかと考えられる。いま一つの前提としては、水津以北の波浪の高い外海を蕪木浦まで、安定的に航行できる舟が登場しなければならない。つまり鎌倉末期ころに、小型の舟の製作技術に変化が生じた可能性があり、波浪に強い安定的な舟が就航したのではなかろうか。

なお、水津に上陸した旅行者のその先の経路であるが、水津から元比田（もとひだ）まで徒歩で北上し、ここから山中峠（標高三八九メートル）を越えて、山中～大桐～帰（かえる）（現南今庄で鹿蒜（かひる）とも書く。ただし帰を中心とする谷全体が鹿蒜郷であった可能性があり、もしかすると今庄も郷内に含まれたかも知れない）～今庄と辿ったものと思われる。

三

そこで最後に、『万葉集』に掲載される大伴家持の歌を引用して、これの持つ問題点を検討しておきたい。

かへるみの　道行かむ日は　五幡の　坂に袖振れ　われをし思はば[8]

これは、大伴家持が天平二十年（七四八）三月廿六日に詠んだもので、帰山への道を私が歩んでいく日には、「五幡（いつはた）の坂」に立って別れの袖を振ってくれるように、と歌っている。つまり、敦賀から陸路を北へ向かう家持を見送るために、見送りの者達は「五幡の坂」までついてくるのが慣例で、ここで双方が別れることとなっていたのである。それではこの「五幡の坂」とはどこを指しているのであろうか。

まず、現在の五幡の地点を家持が通過したと仮定して考えてみよう。すると、①敦賀湾東岸の海岸部を歩んで五幡に達し、さらに水津を経由して山中峠～帰と歩む経路が想定されよう。しかしながらこの経路上には小高い丘陵が打ち続き、直行するのは極めて困難である。しかもこれを避けて海岸部を歩もうとしても、砂浜が途切れて岩石の岬を迂回しなければならない所があり、ほとんど不可能に近い。つまり敦賀湾東岸を海岸線に沿って歩んだとする経路想定は、そもそも想定自体が無理なのである。②そこで丘陵を避けるために敦賀から葉原（はばら）まで谷合いを歩み、次いで山を越えて五幡に達し、ここからさらに水津へ北上し、山中峠～帰と歩む経路を考えてみよう。この経路想定は、必ずしもあり得ないことではない。しかし五幡へ迂回することで相当の遠回りとなるから、なぜこうした遠回り経路を辿ったのかとの説明が必要になるが、それの出来ないところがこの想定経路の最大の弱点である。

このように家持が五幡を通過したと仮定する場合には、いずれの想定にも無理が生じてしまうのである。そこでこの前提自体を破棄して、家持は五幡を通過しなかったと仮定するならばどうであろうか。そうすると、家持は当然、③主要道たる敦賀～葉原～新保～木ノ芽峠～二ツ屋～新道～帰～今庄という経路を辿ったと考える以外にはあるまい（ただし

木ノ芽峠～板取～今庄と辿る場合もあったであろう）。とすれば、この③説を取る場合には、木ノ芽峠越えの主経路が果たして「五幡の坂」と呼称されて差し支えないのか、というように問題点が切り替えられることとなる。

そこでこの点を考える手掛かりとして、集落「帰」と、峠道としての「帰山」の関係を振り返ってみたい。これは『紫式部集』第八〇番の歌の詞書に、

みやこのかたへとて、かへる山こえけるに、よびさかといふなるところのわりなきかけぢに、こしもかきわづらふ[9]

と見える帰山と呼坂を、どこに現地比定するかという問題であるが、筆者はこの帰山を、帰に隣接し、かつ都に向かう者にとっては帰の手前に帰山があるはずとの前提に立って、藤倉山・鍋倉山から三ケ所山にかけての山塊全体を帰山とみなし、その山塊を街道が越える地点、すなわち湯尾（ゆのお）峠を、峠道としての帰山および呼坂と推測したのである。[10]

このような理解を踏まえて、五幡と峠道「五幡の坂」の位置関係を考えるならば、五幡に隣接する山、すなわち五幡を含む海岸線を西麓とし、南麓が葉原・新保、東麓が板取・孫谷、北麓が帰・新道・大桐、そして鉢伏山を頂上とする山塊全体が、「五幡山」と呼ばれた可能性を考えるべきではあるまいか。そしてその「五幡山」を越える峠道は「五幡の坂」と称されたに違いなく、それに該当する地点は木ノ芽峠を除いては考えられない。つまり「五幡の坂」とは木ノ芽峠を指していたのではないかと推測されるのである。

以上の検討によって、「五幡の坂」とは、五幡に隣接する山（鉢伏山の山塊全体）を越えるための峠道、つまり木ノ芽峠を指す呼称だったことが推測された。少なくとも、木ノ芽峠のことを「五幡の坂」と表記することは一向に差し支えないのである。この結論に基づけば、家持は、敦賀～葉原～新保～木ノ芽峠～二ツ屋～新道～帰～今庄という、北陸道の主経路を北上したこととなり、五幡経由の不自然な迂回路を辿ったと想定する必要はまったくなくなるのである。

最後に、平安期の駅家配置に関する『延喜式』の次の記事を眺めておこう。

越前国駅馬　松原八疋、鹿蒜・淑羅・丹生・朝津・阿味・足羽・三尾各五疋。[11]

この規定によると、公的旅行者のための駅馬を、敦賀松原には八疋、鹿蒜（帰）・淑羅などには各五疋配置すべしとされているが、その駅馬が敦賀～鹿蒜間に辿る経路は、これまで述べたごとくに、敦賀～葉原～新保～木ノ芽峠～二ツ屋～新道～帰～今庄という、北陸道の主経路であったとすべきであろう。なお、敦賀の駅家が海岸部に近い松原に置かれた理由は、水津から松原に舟で着いた旅行者が、直ちに駅馬に乗れるようにとの配慮によるものと思われる。

おわりに

本稿の検討で明らかにできた点を最後にまとめておきたい。

奈良期～鎌倉期における北陸道の経路は、①敦賀から舟運を利用して水津に上陸し、元比田～山中峠～大桐～新道～帰（鹿蒜）と歩むものがあった。水津は、敦賀半島に抱え込まれて比較的に波浪が低く、また岬「岡崎」の影響で砂浜が発達していて、舟が乗り上げるには好都合であった。この水津上陸の舟運利用を示す史料としては、奈良期の『万葉集』

から、鎌倉期の『吾妻鏡』・『源平盛衰記』・「藤原隆信朝臣集」などがあり、また興福寺領河口・坪江庄へ下向する検注使を出迎えるべく、各郷から水津夫・伝馬が水津に派遣されていたことを示す史料が得られたのも重要である。なお敦賀での上陸地点は松原であるから、『延喜式』では駅家を松原に設置して、駅馬を直ちに準備できるよう配慮している。

②いま一つの、専ら陸路を辿るものとしては、葉原～新保～木ノ芽峠～二ツ屋～新道～帰～今庄（または木ノ芽峠～板取～今庄）という経路があり、これが北陸道の主経路であった。大伴家持が天平二十年に詠んだ歌には「五幡の坂」が登場するが、これは木ノ芽峠を指してこう呼んだものと考えられ、彼が海岸部の五幡を通過していたわけではないのである。「五幡の坂」を木ノ芽峠に比定する説を、ここに新たな解釈法として提示しておきたいと思う。

注

1　拙稿「中世越前国における北陸道」（『日本海地域史研究』第三輯、一九八一年）、「西街道の変遷と蕪木浦」（『若越郷土研究』第三三巻六号、一九八八年）。

2　「藤原隆信朝臣集」上・旅（『群書類従』第一五輯・和歌部）。なお明らかに誤植と思われる部分を訂正してある。

3　『吾妻鏡』第二、義和元年九月四日条（『福井県史』資料編一・古代）。

4　『源平盛衰記』―「白山神輿登山の事」（『福井県史』資料編一・古代）。

5　「河口庄綿両目等事」（井上鋭夫氏編『北国庄園史料』）。なおこのほかに「坪江下郷三国湊年貢夫役等事」（同書、延慶三年作成）にも、この水津夫・伝馬の記事が見えている。

6　『万葉集』巻三・第三六七首（『福井県史』資料編一・古代）。

7　拙稿「西街道の変遷と蕪木浦」。

8　『万葉集』第一八・第四〇五五首。

9　『紫式部集』第八〇番（『福井県史』資料編一・古代）。

10　拙稿「帰山と呼坂について」（『若越郷土研究』第三三巻三号、一九八八年）。

11　『延喜式』巻二八・兵部省（『新訂増補国史大系』第二六巻）。